

仙台藩を中心とした地域における 延宝五年(1677)に発生した二つの津波の被害記録

東北大学災害科学国際研究所* 安田容子・蝦名裕一

国立研究開発法人 海洋研究開発機構† 今井健太郎

The Records of Damages from Two Earthquakes and Tsunami in 1677 around Sendai Domain Area

Yoko YASUDA and Yuichi EBINA

International Research Institute of Disaster Science, Tohoku University

Aoba 468-1, Aramaki, Aoba-ku, Sendai 980-0845, Japan

Kentaro IMAI

Japan Agency for Marine-Earth Science and Technology

3173-25, Showa-machi, Kanazawa-ku, Yokohama 236-0001, Japan

In 1677, two type of tsunami has occurred around eastern japan coastal area. One is North Sanriku-oki Earthquake, damaged from Simokita peninsula to Iwaki coastal area. The other is Boso-oki Earthquake and Tsunami, is considered that damaged from Boso peninsula to Miyagi coastal area. We discuss damages by these tsunami around Sendai area to study new found historical documents. Around Miyagi area, past Sendai Domain area, there is no historical document about damage of North Sanriku-oki Earthquake and Tsunami. “Oboe-gaki,” the document written by samurai retainer of Sendai Domain, note about daily act of the lord and daily weather information, had information about North Sanriku-oki Earthquake. It said 30 people were died because of the tsunami in March 12th, in Kesen area, southern coastal area of Iwate. This document is the only record about damage of 1677 North Sanriku-oki Earthquake, and the document of Sendai Domain has no information of damage about this tsunami. Then, it is thought that Sendai domain had not recognize this damage in compiling the Lord history in later year. About Boso-oki Earthquake, recent researcher said that Iwanuma, southern area of Sendai city, was swept away and more than 300 people were died because of the tsunami by 1677 Boso-oki Earthquake. But, it can be said that Boso-oki Earthquake and Tsunami did not damage to Miyagi coastal area because of “Jika-kiroku”, the Lord history of Sendai Domain, says that the Lord of Sendai Domain stayed in Iwanuma area for hunting in October 8th, and no record of damage about this tsunami around Sendai Domain. One of the tsunami disasters had not recorded in later year, even if small tsunami might have hit to Miyagi coastal area. And it is thought that tsunami in October 8th did not damage to Sendai coastal area.

Keywords: Historical Documents, 1677 North Sanriku-oki and Boso-oki Earthquake and Tsunami, Sendai Domain

§1. はじめに

延宝五年(1677)には、太平洋沿岸では、二つの津波が発生している。一方は、延宝五年三月十二日(1677年4月13日)の北三陸沖を震源とする地震に

よる津波である(以下、延宝三陸地震津波とする)。他方は、延宝五年十月九日(1677年11月4日)に房総半島東方沖を震源とする津波地震による津波である(以下、延宝房総沖地震津波とする)。それぞれ太平

* 〒980-0845 仙台市青葉区荒巻字青葉 468-1

電子メール: yyasuda@irides.tohoku.ac.jp

† 〒236-0001 神奈川県横浜市金沢区昭和町 3173-25

電子メール: imaik@jamstec.go.jp

洋沿岸の北部と南部を震源とする地震によって発生した津波であった。

三月十二日に発生した延宝三陸地震津波は、宇佐美 2013 により、1968 年 5 月 16 日の十勝沖地震との類似が指摘されている。岩手県沿岸での被害についての歴史資料は存在するが、宮城県における被害記録がどの程度であったのかについては、現在はつきりしていない。

一方、十月九日の延宝房総沖地震津波では、房総半島をはじめ、岩城地方を津波が襲っている。特に、房総半島での被害が大きかったことが、当津波の 30 年後に発生し、大被害を及ぼした元禄地震(1703 年)との比較から指摘されている(羽鳥 1979 など)。また、近年、銚子市で延宝房総沖地震の痕跡が新たに発見され、注目を集めている(2014 年 5 月 5 日付、日本経済新聞、河北新報など)。

宮城県はこの 2 つの地震の震源の中間に位置しているが、今まで確認された資料からは、延宝三陸地震津波による宮城県周辺地域の津波による被害状況は不明であった。一方、延宝房総沖地震津波に関して、宮城県南部の沿岸地域である岩沼市においては、歴史資料より、津波による被害があったことが指摘されている(都司ほか 2012)。本研究は、延宝五年の二つの津波について、人々が認識した被害はどの程度であったのかという点について、資料より明らかにしていくことを目的とする。仙台藩(宮城県と岩手県南部)地域を中心に、後年どのように記録されたかという問題について、また延宝房総沖地震津波については、岩沼での被害について、仙台藩内の資料を用いて考察する。

本研究で取り扱う資料は、仙台藩の『治家記録』や『徳川実紀』である。これらの資料は、災害発生当時ではなく、後年に編纂された資料である。災害関係については、被害があっても記録されないことがあった資料であるが、後年における為政者の災害に対する認識を理解する手がかりとするものである。

§2. 延宝三陸地震津波

延宝五年三月十二日(1677 年 4 月 13 日)の地震は、八戸沖を震源とする、推定 M7 程度の地震であったとされている(宇佐美 2013)。三月十二日の夜、戌の刻(夜 8 時頃)頃から、三月十三日の昼にかけて地震が連続して発生した。三月十三日の子刻(午前 0 時頃)には、下北半島から三陸沿岸までの間に津波が押し寄せた。また、三月十三日の卯刻頃に福島県

の小名浜で潮位の変動があったことが、平藩の『万覚帳』に記されている。

岩手県沿岸北部における推定津波高は 3m から 4m に及んだとされる。盛岡藩において、藩内の役人が記した同時代資料である『盛岡藩雑書』(以下『雑書』)における、各代官所からの被害報告については、表 1 の通りである。同様の表は『日本地震史料』第一巻 p.878 にも記されているが、『雑書』の記述通りに読むと、本表に示した被害数となる。

『雑書』中の三月十七日の記事には、宮古代官所より三月十四日付での書状が届いているが、改めて、十六日付でより詳細な情報が三月十九日に届いている。表中の宮古における被害数は、十九日の記事にもとづくものである。野田代官所からの被害報告数は十七日の記事から、田名部代官所からの被害報告数は十八日の記事にもとづいている。十六日付けの宮古からの報告では、「度々之地震故、北閉伊郡浦々へ大浪寄」と、宮古以北での被害が大きかったことを記す。盛岡藩においては、宮古代官所の管轄する地域(現宮古市)における被害が大きかったようである。

表 1 延宝三陸地震津波による盛岡藩の被害

Table.1 Place, damage about Tsunami of 1677 North Sanriku-oki Earthquake in Morioka Domain.

代官所	浦	家屋流失	船舶流失	塩釜破損	田畑荒地
宮古	宮古		2		
	磯鶏		3		
	金浜	13	10		
	高浜	1~2	3		麦3役
	津軽石		7		麦70役
	赤前	10	6	6	田畑5~6石
	鍛ヶ崎	5			麦4役
	撰待			2	
野田	久喜		3		
	湊		1	1	
田名部	木野部		漁船全て		
	下風呂		漁船全て		
	合計	28軒	31艘	8工	麦77役、田畑5~6石

この地震による津波は、岩手県北部の沿岸において、家屋や船舶等に甚大な被害を及ぼしたが、潮位の変動は福島県いわき市周辺(以後岩城地方とする)にまで及んでいる。『万覚帳』(『日本地震史料第二巻』所収)は、藩内の出来事について記した、平藩の同時代資料である。延宝五年の『万覚帳』三月十三日の記事には、地震の記録はみられないが、津波とみられる大きな潮の満ち引きが、小名浜にあったことが記されている。通常とは異なった大きな程度の潮

の干満が、十三日の卯刻(午前 6 時頃)から始まり、十四日の昼まで続いたとある。

延宝三陸地震津波の津波被害について、資料における北限は下北半島であり、南限は小名浜であるが、記録における人的被害は三陸沿岸北部に集中している。小名浜では潮位変動がみられたのみである。仙台湾沿岸における被害について記した資料については未見であるが、小名浜で潮位変動があったことから、被害として認識されない程度の、規模の小さな津波が襲来した可能性はある。

後年記された記録には、盛岡藩領での被害についてのみ記録されている。『年録(延宝五年)』(国会図書館蔵)は、『柳営日次記』(『日本地震史料』第一巻 p870, 延宝五年の津波に関してはほぼ同一内容)とともに『徳川実紀』にも引用された幕府内の日記である『年録』中の延宝三陸地震の記事について書き出しは以下の通りであり、人的被害がなかったことが報告されている。

一、南部領城下去十三日戌刻より同十五日迄
数度地震、大^(三ツ)蛇浦と申所江潮〔潮〕上ヶ在家
廿軒程損、人馬者別条無之由也

続く詳細部分には、大槌での被害(400~500 間内陸の人家へ潮が上がり、20 軒余り破損)と、宮古での被害(鋏ヶ崎で少しの人家が波に取られ、20 軒程残る。人馬は山へ逃上り恙なし。)について載せる。

延宝三陸地震津波は、宮古や大槌周辺において田畑への浸水被害が大きかったにもかかわらず、昼に津波が襲来したこともあり、沿岸部の人々は高地へ逃げて無事であったことが『年録』に記されている。『徳川実紀』においては、『年録』とほぼ同一内容の『右筆所日記』を引用しており、以下の記述となっている。

南部大膳太夫重信封地奥の南部。此十二日より十五日まで地震数度海潮をしあげ。大槌浦。宮古浦など民屋あまた破損す。されど人馬は山に早く逃のぼりければ。溺死なき旨注進あり。(日記。)

『雑書』には、『年録』等とは異なり、人馬に別条がなかったことは記されないが、具体的な人的被害についても記されない。盛岡藩全体からみれば大きな被害ではなかったため、特に記されなかった可能性

もあるが、人的被害について、必ずしもなかったと確定はできない。被害があったとしても、幕府への報告には載せなかった情報であったといえる。

§3. 延宝三陸地震の仙台藩領における被害

延宝五年三月の地震における仙台藩領(宮城県と岩手県の一部)の被害については、『迫町史資料(第一巻)』における年代記『元和元年より歳(の)吉凶留帳』(『新収日本地震史料補遺』では「近世日誌」として所収)のほか、『米谷郷土史年表』の「延宝五年三月十五日大地震、三月十五日、地震により津波来襲、人畜に被害あり」という記事がある。どちらも、地震の発生した日が三月十五日となっているが、延宝五年に大きな地震、津波があったことについての記録である。津波の被害については、『唐桑町史』に「南部領に数十回の地震があり、津波が起って宮古・大槌方面の被害が甚大であった。しかし当町地方の被害は軽微らしかつた。」という記述がある。宮城県における延宝三陸地震については、地震と津波があったことは知られていたが、その被害状況については不明であった。

3.1 仙台藩の資料『覚書』中の延宝三陸地震津波

NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワーク所蔵デジタルアーカイブ所蔵の写真データ資料に、延宝三陸地震津波について、仙台藩内で地震があったこと、津波による被害があったことについて記した資料がある。延宝三年(1675)正月から天和三年(1683)正月までを記録した本資料は、デジタル化された写真データについてのみ、NPO 法人宮城歴史資料保全ネットワークに保管されており、本論中ではこの写真データを用いた。本資料については、写真データの一枚目には「地震・災害関係史料」とあり、災害記録として採集された資料といえるが、その所在、伝来等について、現時点においては不明な点が多く、今後の調査、検討の必要がある。

本資料の内容は、巻頭において、当時の藩主伊達綱村が生まれた万治二年(1659)から、寛文八年(1668)までの、仙台へ派遣された幕府国目付の氏名、歴代の仙台藩藩主名からはじまり、続いて、伊達綱村が藩主として仙台に初入国した延宝三年(1675)からの綱村の動向、主に饗応や鷹狩りについて記される。誰に会ったかという関係について詳しく述べられている。参勤交代についても載っており、藩主が江戸に在住のときの記事は江戸での出来事が載せられて

表 2 各地における延宝五年三月十二日から十三日の地震

Table.2 Aftershocks records of 1677 North Sanriku-oki Earthquake from March 12th to 13th.

資料	場所	十二日						十三日							
		18:00酉	20:00戌	22:00亥	00:00子	02:00丑	04:00寅	06:00卯	08:00辰	10:00巳	12:00午	14:00未	16:00申	18:00酉	20:00戌
御日記(御国)	弘前 八戸 盛岡 盛岡 宮古 花巻 大槌 官職記 仙台 覚書 稲葉氏永代日記	(十二日より夥しき地震)													
八戸藩日記		(大)	(大)	夜明まで20度			地震			地震度々					
雑書		下刻地震	甚	夜中24~5度			大			西刻より丑刻まで折々地震					
延宝日記		強	夜中24~5度	強			強			15日まで昼夜度々地震					
花印		地震	朝まで9度	朝まで9度			大								
大槌官職記		大	夜明まで15~6度	夜明まで15~6度			大強								
覚書	夥	大	少	少	少	少	大	下刻少							
稲葉氏永代日記	下刻地震		震				大	地震							

いる。藩主の動向以外には、主に仙台における雷や洪水、地震があったことについての記事が載せられるほか、藩内での訴訟などについての記事もみられた。最後は天和三年(1683)正月十九日の江戸における記事で終わっている。以上の内容から、本資料は、藩主に近い立場にいる藩士が書いた記録であり、日記として日ごとに記された記録というよりはむしろ、部分によっては数日分をまとめて記入した、同時代の覚え書きといえる資料である。記述内容から、後年に制作されたものではなく、同時代に記録された資料であるといえる。

本資料中の藩主初入国以降、年間の出来事について記した部分の冒頭には、「此覚書於奥州仙台住居之時記之」とあることから、本論では『覚書』とする。本資料は、藩主の動向以外には、地震や大雨、雷など、日々の気象情報について、ほぼ毎日書き込まれていることから、同時代の災害関連資料としてみる分には、詳細な記録であるといえる。

『覚書』には、延宝五年三月の延宝三陸地震津波について、以下のように記されている。

- △同月十二日、戊子、夜五ツ時夥地震。
- 同日気仙津浪入男女三十人計死ス、同九ツ過地震夥也、同八ツ時地震少、同七ツ過地震少

割注部分には「○光物飛事」とある。気仙郡に津波が入り、男女 30 人が溺死したことを記している。地震の記録は十四日まで毎日続き、その後も「地震少」として九月四日まで度々記録がある。『覚書』の延宝五年中の記事内容は、藩主の婚礼という大きなイベントについてのほかは、地震や、塩竈の水の色が変化したことといった自然現象についての記事が中心となっている。

3.2 延宝三陸地震津波の地震

三月十二日の延宝三陸地震は、余震の多い地震であった。被害の大きかった盛岡藩領においては、『雑書』に、「戌ノ下刻地震、又子ノ刻地震甚、夜中廿四五度間もなく地震有」と、夜中地震が続いていたことが記されている。『雑書』と『覚書』によれば余震は、十月頃まで続いたようである。仙台藩に限らず、盛岡藩や江戸を含んだ各地における三月十二日から十九日にかけての地震記録は表 2 の通りである。資料によれば、どの地域も、十二日の夜に 2 回の大地震を体感している。

また、仙台市における地震については、仙岳院文書『日鑑』(『日本の歴史地震史料』拾遺)に所収)が同時代では詳細な地震記録を持つ資料であるが、延宝五年に関しては、五月に起きた地震については、他藩の資料と同様に、「地震太」と大きな地震があったことについての記述があるが、三月十二日の日記には、地震や津波があったことについては記されていない。一方、『覚書』には、表 2 にある通り、他の地域と同様の時刻に 2 度の「夥地震」と数度の地震が記録されている。延宝五年の地震記録について見る限りでは、同時代の仙岳院文書『日鑑』よりも詳細に、仙台地方の地震を記録した資料である。

『覚書』の記録から、岩手県南部から宮城県北部にかけての地域においては、津波の被害があったことがわかる。気仙郡での溺死者については、藩への報告とは別に、作者が入手した情報のようである。

3.3 延宝三陸地震津波被害と『治家記録』の記述

延宝三陸地震津波について、仙台藩のほかの記録では、地震があったことも含めて、仙台藩の『治家記録』には記されていない。『治家記録』は、藩主の動向について記した家譜であるが、藩主周辺や仙台藩内で起こった火災や水害、地震等の災害について

も、その被害を含めた情報として載せられている。延宝五年部分は、四代藩主伊達綱村(藩主在任 1660～1719)の『肯山公治家記録』巻之四～巻之七にある。二つの地震の内、三月の三陸地震津波発生当日には、藩主伊達綱村は参勤交代のため江戸に在住していた。三月の地震と津波について、記すべき被害があれば、翌月に報告されるはずであるが、四月やそれ以降の記事においても、地震や津波があったこと、またそれによる被害があったことについての記載はない。『覚書』に記載された、気仙郡において30人の溺死者があったという情報については、藩では『治家記録』には取り入れられなかった情報であったと考えられる。

§4. 延宝房総沖地震の被害

延宝三陸地震津波の発生から約半年後の延宝五年十月九日(1677年11月4日)には、房総沖を震源とする推定M8の地震と津波が発生した。地震について記録された資料は少なく、地震津波であったとされる地震である。房総半島への被害は甚大であったことが、『柳営日次記』、『年録』などに詳しく載せられる。津波は房総半島を中心に、茨城県沿岸や福島県の岩城地方にも被害を及ぼしている。本章では、岩城地方での被害について新出資料をもとに検討する。

十月九日に発生した津波は、岩城地方に大きな被害を及ぼした。延宝五年十月九日の夜四時に地震があり、夥しく高波が打上げたことが、代官の興津伊左衛門、山田六右衛門より注進があった。『万覚帳』、『案詞』、『岩城御領内大風雨大波洪水之節覚書』(いずれも『新収日本地震史料(二)』に所収)など、明治大学博物館所蔵の内藤家文書に、人的被害があったこと含め、各地の被害状況などが記される。藩内の浜ごとの詳細な被害記録については、内藤家文書のなかでも特に、『慶天拔書』より読み取ることができる。

4.1 内藤家文書『慶天拔書』における津波被害状況

内藤家文書『慶天拔書』(明治大学博物館蔵)は、奥書によれば、幕府の沙汰書のなかから、慶安三年(1650)から天和三年(1683)十二月にかけての時期における内藤家関係の記事について、後のために記しておくべき記事を抜き書きしたものであり、寛政十一年(1799)十一月二十日に写し終わっている。内題には「御沙汰書抜書」とある。筆写したのは、平藩の御書翰改であった直井三右衛門成春である。『慶天

拔書』の筆写は、『徳川実紀』編纂の時期と重なるため、『徳川実紀』編纂事業にかかわり、『徳川実紀』編纂時に収集された資料の一つを抜書きしたものであるといえる。そのなかに、十月九日に発生した延宝房総沖地震の津波の被害状況についての項目がある。地震記録の末尾に、「私云」と頭書した覚え書きの文章が添えられている。それによれば、十月九日に、上総浦阿部伊予守知行地、阿部美作守知行地、植村土佐守知行地、板倉与五衛門知行地のほか、尾張、水戸においても、高潮によって家や船が破損し、人馬に怪我があったことの委細が、写したもとの御沙汰書にあったことを書き留めている。

『慶天拔書』における各藩の被害については、内藤左京亮(平藩)、遠山主殿(湯長谷藩)、内藤右近(泉藩)の各知行における家屋の損害や溺死者について、浜ごとの被害記録が記されている。表3は延宝房総沖地震津波において、『年録』など『徳川実紀』編纂に関わる資料中に記された流失家屋、人馬の死者、怪我等の被害数である。

『慶天拔書』中の被害状況から、延宝房総地震の岩城地方における被害は、永崎から薄磯のあたりまでの範囲において被害が大きく、特に永崎において、流失軒数、溺死者数ともに他の浜よりも大きい被害となっている。延宝五年十月九日の津波は、房総半島から岩城地方にまで被害が及んだが、岩城地方においては、それぞれの浜に同じような被害があったのではなく、浜ごとに異なった被害であったことがわかる。

『慶天拔書』とほかの資料とを比較すると、江戸幕府の『年録』において、延宝房総沖地震については、房総半島における各知行地の被害記録については記されるが、他の地域における詳細については出来ない。特に岩城地方の被害については、それぞれの知行における被害合計が記されるのみで、『慶天拔書』の記述ほどには詳細ではない。

一方、房総半島での被害数を比較すると、『年録』、『萬天日録』、『玉露叢』に大きな差異はみられないことや、岩城について見ると、『年録』における遠山主殿領、内藤右近大夫領の被害者総数は『慶天拔書』のそれと同一数であることから、これらの資料が同じ情報にもとづいた記録であることが分かる。異なる部分は、内藤右京亮領の被害数である。『年録』中には、「女二十九」とあるのみで、溺死者の総数は記されていないことから、写し漏らしがあったとみられる。

房総半島各地での被害詳細についての記述のある『年録』においては、上総での被害詳細と岩城にお

ける被害詳細の上部には、小さく「欠」とある。この「欠」字は、『日次記』の本文には載せられた記事であるが、別の引用資料『右筆所日記』には記載されていなかった記述内容である(小宮木 2006, p.114)。

『徳川実紀』には、以下のように記されており、被害の詳細については触れていない。『徳川実紀』においては、成書例の三十六条において、大火や洪水などの天変地異のうち、根拠のあるものは載せ、日録に載るところであっても些細なものは省くとしている。『徳川実紀』にあげられた自然災害は、各地の災害の中でも根拠のある大きなものであったとみることができる。一方で、被害の詳細については触れない方針であったことから、被害の実態について『徳川実紀』から読み取ることはできない。

此月上旬より上総の御料并に阿部伊予守正春・阿部美作守正武・植村土佐守忠朝并に御家人の采邑等にかゝりし各浦々・毎日地震・九日にいたり潮をしあげ・民屋頽破し男女あまた死亡し・同日陸奥の田村右京亮建頭・内藤左京亮義恭・遠山主殿頭政亮・内藤右近大夫政親の所領も若干此害にかゝり・其夜尾州も大潮をしあげ・風濤の中より怪しき光物三飛いで・北西の方へ去たり・されど尾州にては家屋人畜此災を免かれたるよし注進す。

延宝房総沖地震における上総と岩城での詳細な被害記録は、実際に大きな被害があった災害であっても、『徳川実紀』には記載されない出来事であった。『徳川実紀』成書例十六条においては、水害や火災などで諸国より報告のあったものについては「今の制秘して示さざる事」であるため、『徳川実紀』中には載せなかったとしている。『徳川実紀』において、地震の詳細な記録については、本来載せるべきであるが、載せられなかった記事であった。

また、『徳川実紀』には、岩城諸藩と岩沼藩においても若干の被害があったことを記している。このことから、『徳川実紀』編纂時には、これら諸藩には津波が来襲したという情報が入っていたことがいえる。宮城県沿岸部における被害については、『治家記録』での記述とあわせて、次章で検討する。

§ 5. 延宝房総沖地震の仙台藩領における被害

5.1 『萬天日録』、『玉露叢』、『徳川実紀』にみる延宝房総沖津波の岩沼

延宝五年十月九日の房総沖地震津波の津波について、『萬天日録』、『玉露叢』、『徳川実紀』においては、岩沼(宮城県岩沼市)において津波による人的被害があったという記事がみられる。『萬天日録』と『玉露叢』はいずれも『徳川実紀』の引用資料となった資料である。これらは同じ情報源にもとづいた記録であるといえるが、いずれも後年編纂された記録である。都司ほか 2012 においては、これらの資料の内容より、岩沼において浸水被害があったことが指摘されている。一方、石橋らは、『萬天日録』と『玉露叢』には被害の大きかった岩城の状況について記されていないことから、「岩沼」は「岩城」の誤記であるとしている(渡辺 1998, 石橋 2003)。

『徳川実紀』には、延宝房総沖地震津波について、前半部分では房総半島における被害について、九日に潮が押し上げ、民家が倒壊し、男女が多数死亡したとしている。続けて、同日に岩沼藩と岩城諸藩において若干の津波被害があったことを述べる。ここに記される田村建頭が岩沼藩主となるのは、田村宗良が没する延宝六年(1678)以降のことである。一方の、『萬天日録』と『玉露叢』には、房総半島における記録の他には、岩城諸藩の記録は載せられておらず、岩沼藩での被害が大きかったことが記されているが、『玉露叢』には、岩沼領は「田村右京太夫領知」と表記される。しかし、延宝五年(1677)には、田村宗良は右京亮であった。これらの誤記は、後年編纂されたことによる誤記である可能性がある。

また、『徳川実紀』にも引用された『年録』においては、上総での被害と岩城での被害については載せるが、岩沼での被害についての記載はない。『年録』は、それ自体に写し漏らしがあることもあるが、被害の大きかった岩城、上総の被害の詳細について出来るだけ載せた資料であること、岩沼での被害の記載が無いことから、『年録』が引用したほかの記録においても岩沼での被害についての情報は記されていなかったと考えられる。

5.2 『治家記録』にみる仙台藩での延宝房総沖津波

延宝五年(1677)十月九日に、岩沼では実際にもどのような人々の動きがあったのか、仙台藩の『治家記録』にみると、地震発生の日十月九日には、岩沼で藩主が鷹狩りを行っていたことが確認できる。『肯山公

治家記録後編 卷之五上』十月九日には、「○辰刻 祠堂御遙拝〔旅装〕、岩沼へ御出。」とあり、藩主伊達綱村は、辰刻(朝8時頃)に仙台城から岩沼へ向けて出発している。途中で鶴一羽、白雁十一羽、鳧四羽を捕獲し、戌下刻(夜9時頃)に岩沼へ到着している。十日は一日中岩沼に滞在しており、鉄砲で白雁四羽を撃ち獲っている。十一日には、辰刻に鷹狩りを行い、雁二羽を鉄砲で撃ち取った後、申下刻(夕方5時頃)に帰城し、祠堂へ拝礼している。津波が到達したとされる亥刻(夜10時頃)にはすでに岩沼に滞在していたにもかかわらず、津波についての情報は記載されていない。また、津波発生の翌日の十日にも、一日中岩沼において鷹狩りを行っている。また、『覚書』においても、十月九日の記事は、「△同月九日、丑、岩沼へ御鷹野出御、岩沼ニ御宿、同十一日ニ仙台御帰城。」とあるのみである。

一方で、『治家記録』においては、10日後の十月二十日の記事において、「○江府ヨリ飛脚到着、去ル九日亥刻岩城津浪ノ書立稲葉正則朝臣ヨリ遣サル。」と、十月九日の亥刻(夜10時頃)に岩城地方に津波があったことについて、飛脚が江戸より到着したことが記されている。これは、平藩が幕府へ報告した情報が、仙台藩へも伝わったことである。

『治家記録』中の藩主の行動と、後日岩城での津波の情報について載せていることから、延宝五年十月九日の房総沖地震の津波被害は、多少の浸水被害はあったかもしれないが、岩沼において、都司ほか2012が指摘するように、岩沼本郷まで浸水するほどの被害はなかったといえる。

また、延宝三陸地震における地震記録が詳細であった『覚書』においては、十月九日においては地震についても津波についても記載がみられない。『覚書』と同様に、『日鑑』においても、十一月や十二月の地震についての記載はあるが、十月九日の地震や津波については記述がみられない。延宝房総沖地震津波に関しては、仙台藩において『治家記録』に被害が記されなかったのではなく、実際に地震そのものが感じられなかったとみることができる。

『萬天日録』、『玉露叢』に記された岩沼での被害についての記事について、『慶天抜書』にみられた岩城諸藩の被害数の合計と、『萬天日録』中の岩沼における被害数とは異なるが、岩城の被害の誤記であった可能性がある。岩沼において別の年代に発生した災害についての誤記であった可能性もあり、さらに検討が必要であるが、両書に記された岩沼において

490軒の人家が流れ、123人が溺死したという記述については、延宝五年十月九日に岩沼で起こった出来事ではなかったといえる。

§6. おわりに

延宝五年に発生した二つの津波は、『徳川実紀』においては、両方の津波について記録されており、後年において記録すべき災害として認識されていたといえるが、被害の詳細については載せられなかった情報である。一方、仙台藩における後年の記録である『治家記録』には、両方の地震と津波について、その被害だけでなく、情報についても載せられていない。このうち、延宝三陸地震津波については、仙台藩において人的被害があった可能性のある地震であったが、記録されなかった地震であった。一方、延宝房総沖地震津波は、仙台藩においては被害として認識される津波被害が無かった地震であった。

被害の認識について、仙台藩が延宝五年の三陸地震の被害が『治家記録』に記載されなかったことは、編纂時に被害の情報が手に入らなかったことが考えられる。『覚書』において、気仙郡での被害が報告されていることは、仙台藩の三陸沿岸において津波の人的被害があったことを示している。ただし、『覚書』に記された気仙郡での死者30人については、津波による被害であったのか、他の海難事故による被害だったのか、また、一ヶ所の浜における溺死者数か気仙郡全体における溺死者数かという点も含めて、本資料の情報だけでは疑問が残る。『覚書』の著者がどのようにしてこの情報を入手したのかということについては、同資料の制作背景、伝来とあわせて検討する必要がある。また、被害があったとしても、仙台藩全体からみた被害は小さいものと認識されたため、『治家記録』には記載されなかった可能性も考えられる。

一方の延宝房総沖地震の場合は、『治家記録』に被害が記されなかったことは、被害として認識されなかった現象であったことによると考えられる。『治家記録』において、津波発生時から翌日にかけて藩主が当地に滞在していたことが記録されていることから、仙台藩において被害として認識されるほどの津波は来襲しなかったといえる。また、『治家記録』だけでなく、日々の地震や自然現象を詳しく記していた『覚書』においても地震や津波の情報が記されていない。このことから、延宝五年の房総沖地震津波に関しては、『治家記録』に被害が記載されなかったのではなく、仙台藩における津波の被害はなかったか、被害と

して認識されない程度であった可能性が示唆される。延宝房総地震津波において仙台藩の沿岸域では、実際に津波や潮位変動の現象はあったと考えられるが、人的被害等の被害はなかったといえる。

謝辞

本研究は、東北大学災害科学国際研究所、特定プロジェクト研究「1677年延宝三陸・房総沖地震の再評価と1611年慶長奥州地震との関連性」(代表:今井健太郎)の一環として実施された。

『万覚帳』、『慶天拔書』など平藩の関係資料については、明治大学博物館に閲覧の許可をいただいた。

対象地震: 1677 延宝三陸地震津波, 1677 延宝房総沖地震津波

文献

- 迫町町史編さん委員会編, 1974, 迫町史資料第一巻, 宮城県迫町, 79pp.
- 羽鳥徳太郎, 1975a, 房総沖における津波の波源—延宝(1677年)・元禄(1703年)・1953年房総沖津波の規模と波源域の推定—, 地震研究所彙報, 50, 83-91.
- 羽鳥徳太郎, 1975b, 三陸沖歴史津波の規模と推定波源域, 地震研究所彙報, 50, 397-414.
- 羽鳥徳太郎, 1979, 九十九里浜における延宝(1677年)・元禄(1703年)津波の挙動—津波供養碑の調査から—, 地震研究所彙報, 54, 147-159.
- 羽鳥徳太郎, 2002, 関東・伊豆の歴史津波, 月刊海洋号外, 28, 73-79.
- 羽鳥徳太郎, 2011, 津波地震で発生した津波—1677年房総沖地震—, 月刊海洋, 43, 4, 199-203.
- 石橋克彦, 2003, 史料地震学で探る1677年延宝房総沖津波地震, 月刊地球, 25, 5, 382-388.
- 唐桑町史編纂委員会, 1968, 唐桑町史, 宮城県本吉郡唐桑町, 583pp.
- 小宮木代良, 2006, 江戸幕府の日記と儀礼史料, 吉川弘文館, p114, 118.
- 平重道編, 1976, 伊達治家記録, 8, 宝文堂, 467-468, 471-472.
- 竹内仁・藤良太郎ほか, 2007, 延宝房総沖地震津波の千葉県沿岸～福島県沿岸での痕跡高調査, 歴史地震, 22, 53-59.
- 東京大学地震研究所, 1982, 新収日本地震史料 第二巻.
- 都司嘉宣, 上田和枝, 1995, 慶長16年(1611), 延宝5年(1677), 宝暦12年(1763), 寛政5年(1793), および安政3年(1856)の各三陸地震津波の検証, 歴史地震, 11, 75-106.
- 都司嘉宣・今井健太郎ほか, 2012, 宮城県及び福島県の沿岸での延宝五年(1677)房総及び慶長十六年(1611)三陸地震津波の痕跡調査, 津波工学研究報告, 29, 189-207.
- 都司嘉宣・馬淵幸雄ほか, 2014, 延宝5年(1677)北三陸沖地震, 宝暦12年12月(1763年1月)八戸沖地震, 天保14年(1843)根室沖地震, および, 安政3年(1856)北三陸沖地震の各津波による東北地方北部沿岸での浸水高分布, 津波工学研究報告, 31, 149-199.
- 宇佐美龍夫, 1998, 「日本の歴史地震史料」拾遺, 63pp.
- 宇佐美龍夫・石井寿ほか編, 2013, 日本被害地震総覧[599-2012], 東京大学出版会, 67pp.
- 渡辺偉夫, 1985, 日本被害津波総覧, 東京大学出版会, 206pp.

表3 延宝五年十月九日房総沖地震津波の各地における流失被害

Table.3 Place, damage and current place of historical documents about 1677 Boso-oki Earthquake and Tsunami.

資料	現住所	資料中の場所	軒数(物置等)	溺死者	怪我	牛馬	破船	塩	穀物	稲	鯛	
年録 (柳営日記)	千葉県いすみ市大原	小浜浦	25・6	9								
	千葉県いすみ市岩船	岩船浦		40	57							
	千葉県いすみ市大原	矢指戸村	24・5	13								
	千葉県いすみ市岬町和泉	御領和泉村	家数不知	13								
	千葉県いすみ市御宿	御宿浦		170	53							
	千葉県長生郡一宮町東浪見	東湯見村		40	97							
	千葉県勝浦市部原	部原村	5・6	子供2								
	千葉県勝浦市沢倉	沢倉村		11	子供2							
	千葉県勝浦市川津	川津村		19	子供2							
	福島県いわき市	内藤左京領内		330	女29	数多	30	17	塩釜10			
	福島県いわき市	遠山主殿領内		218	44	数多	馬5	30				
	福島県いわき市	内藤右近領内		39	13	数多	馬3	54				
	愛知県知多郡	尾州知多郡内						24・5				
蔵有院殿御夷紀55	茨城県水戸市	水戸	189	36			53		1400			
萬天日録	宮城県岩沼市	奥州岩沼	490	123		馬27						
	茨城県水戸市	水戸	189	36			353	856	1004	432	7384	
	千葉県いすみ市大原	上総小浜浦	25	9								
	千葉県いすみ市岬町和泉	和泉浦	倒家無数	13								
	千葉県いすみ市岩船	岩船浦		40	57							
	千葉県いすみ市大原	矢志戸村		25	13							
	千葉県いすみ市御宿	御宿村		30	36							
	(千葉県勝浦市部原のことか?)	新宮村		17	9							
	千葉県勝浦市沢倉	澤倉村		19	7							
	千葉県勝浦市川津	川津村		19	3							
玉露叢	茨城県水戸市	水戸	89	36			353	856	1004	432	7384	
	千葉県いすみ市大原	上総小浜	25	9								
	千葉県いすみ市岬町和泉	和泉浦	倒家数不知	13								
	千葉県いすみ市岩船	岩船浦		40	57							
	千葉県長生郡一宮町東浪見	東浦見村		50	97							
	千葉県いすみ市大原	屋佐志戸		25	13							
	千葉県いすみ市御宿	御宿浦		30	63							
	?	小村		6	2							
	(千葉県勝浦市部原のことか?)	新宮村		17	2							
	千葉県勝浦市沢倉	澤倉村		11	2							
千葉県勝浦市川津	川津村		19	3								
宮城県岩沼市	奥州岩沼		490	123		馬27						
岩城御領内大風雨大波洪水之節覚書	福島県いわき市	内藤左京亮領(小名浜・長崎・中ノ作・薄磯・四倉・?・?・浜)	330	75(男46・女29)	数多	30	97	塩釜10	560俵			
	福島県いわき市	遠山主殿領(江名・豊間)	218	44(男24・女20)	数多	5	31					
慶天拔書	福島県いわき市小名浜	小名浜	32	6	7		47	塩釜7	546俵			
	福島県いわき市永崎	永崎	153(96)	42	12	24	5	塩釜1				
	福島県いわき市中ノ作	中ノ作	29	14		5	9					
	福島県いわき市平薄磯	薄磯	116(56)	13		1	12	塩釜2	13俵			
	福島県いわき市平沼の内	沼ノ内					2					
	福島県いわき市四倉	四倉					15					
	福島県いわき市久之浜町久之浜	久之浜					4					
	?	小名舟戸		2								
		内藤左京亮領合計		330	77	19	30	94	塩釜14	米559俵	糯米950俵	
	福島県いわき市江名	江名浜		129	36		3					
	福島県いわき市平豊間	豊間		89	8		2					
		遠山主殿領合計		218	44		馬5	31				
	福島県いわき市泉町下川	下川初浜		13	10	3	3	14				
福島県いわき市岩間町	小浜岩間		26	3			16					
(福島県いわき市錦町か?)	米ノ倉					33	鮭取舟24					
	内藤右近大夫領合計		39	13	36	3	54	塩釜10				
	岩城合計		587	134	55	38	179					

資料『慶天拔書』(明治大学博物館蔵)

内題「慶天拔萃」

(延宝五年)

一、十月九日

夜四時地震、海夥敷鳴、高波打

上候由、御代官興津伊左衛門、山田六右衛門方

注進候由

今夜亥刻岩城濱々高潮之覚

内藤左京亮義概領内

一、家数三百三拾軒 流亡潰家共二

内

三拾二軒

小名濱

百五拾三軒内九拾五軒ハ長屋馬屋物置 永崎浦

二拾九軒

中ノ作

百拾六軒内五拾七軒ハ長屋馬屋ないや 薄磯

一、船数九拾四艘

内拾式艘者江戸往來舟、八拾式艘者獵船

内

四拾七艘

小名濱

五艘 永崎
九艘 中ノ作
拾貳艘 薄磯
二艘 沼ノ内
拾五艘 四倉
四艘 久之濱

右之内拾壹艘行衛不知，三拾艘用ニ不立，五拾三艘中破損

一，塩竈拾四口内七口小名濱一口永崎二口薄磯
一，溺死七拾七人内四拾八人男廿九人女

内

六人内一人女 小濱[名]濱

四拾二人内十七人女 永崎

拾四人内三人女 中ノ作

拾三人内七人女 薄磯

二人内壹人女 小名舟戸

一，怪我人拾九人

内

七人 小名

拾貳人 永崎

一，死牛馬三拾疋

内

二拾四疋内一疋牛 永崎

五疋 中作

壹疋 薄磯

一，米五百五拾九俵 臺所米流亡

内

五百四拾六俵 小名濱

拾三俵 薄磯

外九百五拾俵濡米

右之外少々破損家船数不知

遠山主殿頭[政亮]領内

一，家数貳百拾八軒 流儀

内

百貳拾九軒 江名濱

八拾九軒 豊間

一，船数三拾壹艘 行衛不知用ニ不立分

内

拾九艘 江名濱

拾貳艘 豊間

一，溺死四拾四人内廿四人男廿人女

内

三拾六人 江名

八人 豊間

一，同馬五疋

内

三疋 江名

二疋 豊間

内藤右近大夫領内

一，家数三拾九軒 流亡

内

拾三軒 下川初濱

二拾六軒 小濱岩間

一，船数五拾四艘 行衛不知破損共

内

拾四艘 下川

拾六艘 小濱岩間

二拾四艘 米ノ倉 鮭取舟

一，溺死人拾三人内八人男 五人女

内

拾人 下川初濱

三人 小濱岩間

一，過人三拾六人

内

三人 岩間

三拾三人 米ノ倉

一，死馬三疋 初濱

右舍而

家数五百八拾七軒

船百七拾九艘

塩竈拾口

死人百八拾九人内五拾五人過人

馬三拾七疋并牛一疋

右怪我人之内拾六人程経テ死

内

二人男女 永崎濱

拾人男内三人他領之者 江名濱

二人女 豊間濱

二人女 薄磯濱

[私云]

右同日[十月九日ナリ]上総浦阿部伊豫守利重様御知行所高潮，阿部美作守正武様御知行所，植村土佐守忠朝様御知行所，板橋与五衛門様，御知行所，其外尾張様御領分，水戸様御領分，高潮ニ而破損家船人馬怪我等有之趣，委細本書ニアリ，爰ニ略ス